



教養教育雑感

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 油川, 英明 メールアドレス: 所属:
URL	https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/7591

教養教育雑感

油川 英明

環境教育グループ

本学は2006年度の新課程発足に伴い、新たなカリキュラムをスタートさせた。そのなかで、教養科目も大幅な変更がなされ、いくつかのカテゴリー（科目群）にまとめられて実施されている。すなわち、コミュニケーション科目群、地域学科目群、人間・子ども理解に関する科目群、大学入門科目群、現代を読み解く科目群及び日本国憲法、体育科目、情報機器の操作の科目群ということである。これは、1991年の大学設置基準の大綱化及びその後の中教審答申に沿った教養科目の設定であるが、これらの教養科目の設定に関する論議については他に譲るとして、ここでは一教員として、昨年度の「現代を読み解く科目群」のなかの「かたちの科学」を担当したなかで感じたことを以下に少し述べることにする。

学生の学習に対する興味・関心は時代とともに変化し、また、昨今、一般に言われてきている学力の低下、つまりは学習意欲の減退などから、大学の、特に教養教育の授業においてはこのようなことが十分に考慮されなければならないものと考えられる。つまり、本小論の場合、教養科目としての「かたちの科学」などは、科学的な現象をできるだけ具体的に示すことにより、受講学生がもの見方や考え方を学べるように企図して行われるべきではないかということである。端的に述べるならば、学生には科学的な事例をひとつの「教材」として提供し、学生はそれらの「教材」を通して、科学とは何であるか、なぜそのように考えるのか、そのことにより何が自己のなかに得られるのかなどを「考える」ということに主眼が置かれるべきであろう。つまり、教養教育のひとつの目的として、学生がものごとを「客観的に考える」という素地をつくりだすことにあると思うわけである。

教材といえ、一般には初等教育などで授業内容を具体的に展開し、その理解を深めるために必要不可欠なものであるが、昨今の大学における教養教育においては講義内容そのものをも「教材」として考

えなければならない面もある。つまり、現時点の学生の知的欲求を出発点として講義を展開しようとするならば、知識そのものを「教材」と見なして、「知る」ことを学生に実感させるということである。このような思慮を必要とする状況は、学生がこれまで受けてきた学校教育や社会環境によりつくりだされてきたものと考えられ、今後、より詳細な分析とそれへの具体的な対応が望まれるであろう。

学生は、一般的には、過去において学んできたこと、あるいは今後学んでいくことについて多少なりとも疑問を持っているはずである。つまり、「何のために学ぶのか？」ということである。しかし、これを直接的に問いかけてくる学生は余り見られない。このような疑問は、学習、つまりは外的な情報を自己のなかに取り入れるという作業であることから、人間の本能的な活動とは質的に異なる後天的・強制的なもので、これらの間には当然ながら葛藤が生じているはずである。それが「なぜ勉強するか（しなければならぬか）？」という疑問になって表れてくる。このような疑問は一個人が自我の形成を成していく段階で必然的に抱くものであるが、それが、今日の状況においては受験ということで一時的に埋没されることである。そして、受験が一段落すればその疑問は顕在化するはずのものであるが、しかし、昨今においては学生がそのようなことを顕在化させることは余り見られず、むしろそれを意識的ないしは無意識的に潜在化しているように感じられるのである。本来ならば顕在化するものが、実際には潜在化され得るということは、このようなことに対して思考することを要しないような社会的環境が存在しているということになる。つまり、学生は成長過程において根本的な疑問を先送りするような教育・社会環境を経てきており、学習の意義を削いだかたちで知識が注入されることから、思考過程を伴わない知識が機械的に積み上げられてきているように見受けられるわけである。結論的には、これまで述べて

きたような疑問は、学生が「回答を得なければならぬもの」というよりも、むしろ学生が「解放されなければならぬもの」と考えられ、その手はずを教養科目などの履修で学生に少しでも得られるように望んでいる。

受講している学生から受ける印象は、学習の内容が日常生活（生きること）に結びついていない、ないしは結びつけられないということである。一般に、学生に限らず誰でも、身の回りの環境（自然界全般、あるいは社会現象の全て）を熟知し、生きることについての確信を完全に持っているという人間はまずいないであろう。このことは、特に学生の年代では、漠然とした不安（あるいは興味）となって存在しているはずで、学習の内容はこれにすこしでも触れたものでなければならぬと考えられる。つまり、先の「なぜ学ぶか？」という疑問はこのことに帰着するわけで、そこからの解放に寄与するものでなくてはならないということである。このような学習が継続されるならば、学生は件の疑問に対する道筋を見いだし、そして、学習そのものに興味を覚えるのではないかと思われる。

学生に対して単に科学の法則や原理を示し、それを記憶するように催促することは、授業そのものが「いつか来た（受験の）道」としか映らないのではないかと想像される。それ故、例えば自然科学の分野に関係した学習においては、単に「落下の法則」を示すのではなく、それを「知りたい」と思う事例に学生を導き入れなければならない。その時に基本と考えられることは、学生が「現在に生きている」ということに触れる、つまりは現実的な事例をどのように取り入れていくかということである。このことについては、例えば、これまでの学習とは視点を変えて、スペースシャトルがどのようにして地球を回っているか、あるいは月探査衛星「かぐや」の具体的な活動など、または他の観点から、「魔法の絨毯」で飛ぶことや「呪術の空中浮遊」はなぜ発想されるかなど、身の回りで起こっている科学的ないし是非科学的なことを学生の目線で、「落下（の法則）」というキーワードのもとに解説することが必要ではないかと思うわけである。これらを通して、学生が法則を「覚える」ことを意図するのではなく、「なるほど」とか「なぜ？」とか感じる気持ち（意識）が芽生えれば、それで十分であると考え。人はある程度の満足感や疑問が得られれば、それが学習の意欲

へと質的に転化して行くからである。

ところで、自然科学が一定の特殊性を有していることは否めない。すなわち、「自然」は人間の存在やその意識に関係なく存在する。これに対して、言語、芸術、歴史等の人文、社会科学に関係することは、人間の存在がなければ、つまりは意識がなければ成り立ち得ない。つまり、科学は自然であれ人文、社会であれ、人間の意識のもとに存在するが、その対象は人間の存在と無関係なもの（自然）と、人間の存在意識から発したもの（人文、社会）の違いが歴然としていることである。ここに、自然科学の非日常性が存在するものと考えられる。つまり、自然科学は、通常の間人間生活においては非日常的なものである。これは、農林水産業や鉱工業などの第一次産業に従事する人々のように、自然現象が生活（生計）の一部となっているのでない限り、科学の研究者といえども、自然現象を観察し、解析し、実験することなどは非日常的なことであると言える。例えば、日常、飛行機や自動車に乗っているとき、誰もが重力の大きさや風の抵抗力を意識したり、見積もったりはしないであろう。これに対して、金銭を数え、詩歌を詠み、過去を想起する等のことは日常生活のなかに多々あることである。このことを踏まえた上で科学的事項の解説を行うことが学生には肝要であると考えられる。

自然科学の特殊性や非日常性については上に述べた通りであるが、一方、自然の現象に関する科学的な法則は人間が見いだしたもの、つまりは人間の思考から生まれ出たものであることから、人が生きていることに関係していないものはないと考えられる。それ故、それを現代に当てはめて理解することは、学生に限らず、一般にも必要な方途で、人文科学や社会科学においてはなおさらのことであると考えられる。ただ、そのためには、学生が自己の存在について思考する気持ちを幾ばくかでも有していることが前提であることは言うまでもない。このようなことから、教養科目の授業は専門教科に比して相応に周到な、そして巾広い内容の準備が要求される。それは、著者の狭い専門領域をはるかに超えるものであるが、自己の研究方法を敷衍することによって全くの異分野の内容をそれなりに整理し、興味を持つこともできる。その面白さを「力」と頼み、学生に種々の内容を解説してきたわけであるが、その意味で、教養教育の科目を担当することは相応の労力と

時間を要すると言えるであろう。しかし、その分、担当する側の「教養」が点検され、鍛えられることも事実であり、教養科目の担当者は、これに刺激を覚え、自らの楽しみとすることが求められるわけである。

さて、教養教育に関連して、学生を理系、文系と分けすることがはたして必要なことであろうか、少し検討してみよう。教員養成系大学が文系ということで高校の進学指導がなされていることに対して、大学もそのままの「路線」で学生を区別し、入試などの制度にまでそれに沿わせることは余りに迎合的で、即座には賛同しかねるわけである。教員養成系大学に所属するスタッフは、文系と思いこんで（思い込まされて）入学してくる学生に対して、自らの教育理念や科学思想をもとに、理系的な知識内容がそのような学生に受け入れられるように工夫してい

かなければならないものとする。何よりも、高校の進路指導による影響や、その硬直した「理系・文系」の思考パターンこそ大学として「洗浄」してやらなければならないことである。あるいは、教員養成系大学としての自然科学教育を構築してきたかどうかということの内省しなければならないことである。これは、大学の他学部、例えば理学部、工学部、医学部などにおける自然科学の教育も、当然ながら各々の特性に基づいた内容が求められるであろうことは論を待たないわけである。つまり、固定した自然科学教育というものはどこにも存在しないのであって、それぞれの分野に最も適合した自然科学の教育を各々、組み立てていかなければならないということである。

(物理学研究室)